

カウンセリングと来談者の主体性—精神分析的考察

椿 田 貴 史¹

はじめに～木村敏の自己論を手がかりに

本稿では、カウンセリングに来談する人の主体性に関して、フロイトに始まる精神分析の見地から検討を加えるが、その前に、木村敏の「自己」論を手がかりにして主体概念の存在論的な基礎について確認しておきたい。

木村はその著『自己・あいだ・時間』において、自分という現象は「おのずから」という自他未分の匿名性のもとにある、根源的な自発性の流れから、身体を基礎とした個性へと“自”を分有することで「自分ということ」が成立するとした²。前者は、古来の哲学者や自然科学者によって様々に仮定され前提とされてきた、対象化される以前の自然そのものとも呼ぶべき事実である。木村はアリストテレス（共通感覚論）からハイデガー（存在論）や西田幾多郎（絶対矛盾的自己同一）などの哲学、哲学的傾向の強い心身医学を展開したヴィクトール・フォン・ヴァイツゼッカー（ゲシュタルトクライス）、精神医学においてはルードリッヒ・ビンズヴァンガー（現存在分析論）やミンコフスキー（生きられる時間）、ヴォルフガング・ブランケンブルク（自然な自明性）等々を援用しながら独自の自己論を展開した。彼の自己論の境地から考えると、述語的、存在論的、ノエシス的などと表現される自然と、ものとしての、身体としての、さらには個性の原理としてのノエマ的自己との間には、同一性における差異がある。このような差異を内に孕んだ存在としての自己の構造は生成的・動的であり、その運動に障壁が生じると自己の個別化の病理がもたらされることになる³。それがもっとも好発するのが、自己の存在を深く問い直す青年期である。

こうした匿名性、雰囲気、間、自然さ、自明性、生命的なつながりなどと表現される述語的次元と自己とのつながりを強調した木村の自己論は、カウンセリングに訪れる人々を理解する際には、きわめて重要な手がかりを与えてくれることが多い。特に青年期における悩みは、「空気を読めない」「雰囲気がつかめない」「違和感をもつ」「なぜか人との距離がつかめない」「なんだかやる気がしない」「よくわからない」「しらけている」「むなしい」「気遅れしてしまう」「実感がわからない」といった述語的な次元、若者たちの言葉でいう「雰囲気」や「空気」などの「気」の問題系に属しているからである⁴。彼らはそれが実質的にどのような事態であるのか、それほど正確に名指すことはできない。これは言語表現の未熟さに起因するのではなく、彼らの主体性そのものに根ざした、存在論的な限界と呼ぶべきものなのである。そもそも何か

¹ 名古屋商科大学

² 「すなわち、この「自」がもともと主客未分の或る根源的な自発性を指すものと考えれば、自然とは自がおのずから自のままにある姿、根源的自発性はその自発性を損うことなく自由に湧出している姿を指しており、一方自己とは、この根源的自発性を主体の側に引き受けて、「み」すなわち自己身体の内部分からの起源のものと見立てたあり方を指している—中略—自然と自己とは、本来ひとつの起源から分かれたものである。」(208-209頁)

³ 木村はここに統合失調症の成因を求めている。

を名指すという行為自体が、個別化され形骸化した様相においてなされるが、彼らが困っている事柄は、そうした個別化以前の、木村の言葉で言う「あいだ」や「間」という動的現象領域であるため、名指すことによってその悩みを表現することは困難なのである。

ブランケンブルクは、その著『自明性の喪失』のなかで「当たり前ということがわからない」という単純型の統合失調症の事例を分析したが、こうした前述語的な水準に問題を抱えているのは、統合失調症者のみではない⁵。就職活動やキャリア教育などを通じて、「自分という人間が何者であるのか」「何を欲しているのか」を他者や周囲の環境から直接間接に問われる青年たちは、人々の渦の中から“自”（おのずから）を分有する作業のみならず、積極的に“自”を勝ち取る、生き残るといった困難な作業を強いられている⁶。様々なことを語り、問いかけてくる他者たちは「自分」ということを覚醒させてくれる自覚の契機であると同時に、「自分」や「自己」の実現を挫く契機ともなるのである。

述語的次元の問題は、人と語ることがきわめて困難である。それは、我々自身が悩む事柄、そしてそれを表現する際に用いられる言語そのものがノエマ的性質をもっており、人間関係についての語りにおいては、ノエシ的な水準で起きている問題をノエマ的なシステムに変換するという無理の多い作業をしているためである。

また、カウンセリングそのものが、カウンセラーという他者と向き合う場である、という困難も存在する。つまり、述語的水準の存在論的な差異に悩みを抱える人々が悩みを語るためには、まず彼らが個別性の原理を、カウンセリングに来談する主体として、カウンセラーと対峙することによって実現しなければならない。ところが、このような個別化の運動（自己の奪還、分有）こそ彼らがかつても苦手とするところなのである。脆弱な仕方でも個別化された自己は、語ることによって相当なエネルギーの消耗を伴うため、容易に消失してしまいかねない。したがって、彼らはカウンセリングにおいても、みずからの主体性を維持しえない弱さを抱えている。

筆者は、ここにこそ自由連想法を掲げて創始された精神分析の実践的な強みがあると考えている。周知のように、古典的な精神分析の技法である自由連想法においては、治療者としての分析家は、来談者の視野から消えるように背景に座り、来談者は自分ということをしてできるだけ意識せずに、心に浮かんできた言葉や発想を伝える。ここには、通常のカウンセリングで想定される、

⁴ たとえば、木村（1970）の『自覚の精神病理—自分ということ』において次のように述べている。「自己の個別性の自覚はけっしていわば先天的に、個別的身体と共にあたえられているのではない。自分が自分になりきるためには、人はまずこの気の領域での他人との同一性から改めて自分自身を奪いかえさなくてはならない。そしてこの自己奪還の作業は、人間が生まれてからの長い成長過程の間に極めて徐々に準備され、形成されて行かなくてはならない困難な作業なのである。」（225頁）

⁵ ブランケンブルクが分析したアンネ・ラウは、様々な仕方でも自分に何か基本的なこと、単純なことが欠けており、それによって人間関係そのものに違和感を抱いていることを報告している。ブランケンブルク（1978）は次のように述べている。「アンネが《ちょっとしたこと》、《大切なこと》、《根本的なこと》ということばで言い表しているものは、それゆえ、基底性（basal）な性格を持っている—中略—健康な現存在においては、その基本的・構成的な意味を分離した形で取り出すことは容易ではない。」（107頁）

⁶ ブランケンブルクが報告したような統合失調症者と、ここで扱っている青年期の心性は、共通する問題圏を持っている。しかし、後者が同類によって支えあう間主観的な安全基地から強制的に社会的他者と出会うように強いられる際に、自己の自己性を再び（つまり二度目として）問い直す作業であるのに対し、ブランケンブルクの症例アンネ・ラウにおいては、二度目ではなく、原初的な自己の存在論的次元を受動的に問いただされている、という違いがあると考えられる。つまり、前者は神経症圏にある。

積極的に悩みを悩む「自分」という主体性のようなものは想定されていない。精神分析的な空間においては、対話ではなくモノローグが、明確な思考ではなく空想が、覚醒時の記憶よりも夢の記憶が、明晰な論理よりも言い間違いが、意味のある言葉よりも意味をなさないような言葉の断片が重要視される。つまり、分析的作業のはじめは「これが自分だ」という、意識と明晰性を金科玉条とする主体性は全く想定されていない。むしろ、そのような主体性からこぼれ落ちたような、“主体性の残り屑”のようなものを集めることから分析が始まる。

こうした細かい失策行為や言い間違いについて、たいていの来談者は「これは自分の意図していたものではない」と言う。精神分析においては、このように否定する主体がやってくるのが想定されている。「これらは自分ではない」「自分はそのことには悩んでいない」と語る主体とその主体がゴミ屑のように見捨ててしまうような象徴的なものの断片の間にこそ、木村敏の現象学的人間学において解明のターゲットとされたノエシ的自然とノエマ的自己の存在論的な差異が顕現しているのではないだろうか。

来談者の主体性ということに関して、精神分析的認識を迫るような問題は以上のような考察から生じている。

1. 来談者

来談者は通常「クライアント」と表記される。しかし、フィンク（1997）は、クライアントとは、何を消費しようとしているのかを明確に把握している人物のことであるとして、この語を精神分析の来談者を表すものとしては不適切であるとみなした。とりわけ心理臨床においては、人は作業の結果としてもともと期待し、望んでいたものとは異なる何かを得たり、実感することが多い。よってフィンクは精神分析に訪れる人が、必ずしも何を求めているのか、分析の結果として何を手にするのか明確には理解していない点を強調し、分析に来る人を表す用語として、*analysand* = 分析主体というラカンの用語を採用している。つまり、分析をするのは来談した本人である、という視点がここにある。精神分析において、主体という言葉は、自ら話すという意味での自由連想をすることと結びついた言葉であり、必ずしも何か（悩みや責任や運命）を引き受ける人物を意味しているわけではない。

一方、ラカン派以外の精神分析では、分析主体ではなく「被分析者」という言葉を用いることが多いが、この語は分析の主体性が分析家の側にあるのか、それとも相談者のほうにあるのか曖昧である。語る主体は来談者である。よって、被分析者という用語は不適切であるばかりか、フロイトの発想からも遠いように思われる。

多くのカウンセリングの現場では、来談者というロジャース派の用語が用いられている。以上のような精神分析的な観点から考察するならば、来談者の多くについて言えることは、自らの悩みについて引き受け、語らう決意をする前の段階でカウンセラーを訪れる者もいる、ということである。これをわざわざクライアントと言うと誤解を招くので「来談者」という（日本のロジャース派の）用語を用いるのが適切であろう。気をつけなければならないのは、来談者はカウンセラーからすれば、語る主体としてやってくるのが前提ではあるが、必ずしも、語る主体として想定されていることを本人が知っている訳ではない、という点である。談という語は自分が話すのか相手が話すのか、その両方が話すのか曖昧だが、この用語に含まれる曖昧さは、かえって今日的な来談者の実像を表しているように思われる。

2. 来談者の主体性と構造について

「構造」という言葉は、カウンセリングをはじめとする心理臨床の世界では、実はあまり使われていない言葉である。「構造化」という用語は時間や場所、料金や目的、回数その他に関して来談者と取り決めを交わすことを言う。

社会科学の方面では、社会的交換関係のように、何らかの社会的資源や人が交換される体系を指してこの語が用いられる（亀田・村田、2010）。そして、精神分析において構造という語が用いられる場合には、ラカン派に代表されるように、無意識と言語活動に関する構造という複雑な構造を想定している場合が多い。しかし、無意識ということも考慮に入れなくとも、精神分析は言語の交換が生じているし、また、分析家の側の時間と分析主体が支払う料金の交換が生じている。こうしたことが手ごかりに、ここでは、カウンセラーと来談者の言葉が交わされる＝交換されるという interpersonal な水準をまずは考えることができる。

さらに「構造」を物的環境というよりも、来談者をカウンセリング室へと導いた、周囲の人々の働きかけや制度的側面などの社会的環境をも含めて考えることもできる。たとえば、ある学校では具体的な勉強方法については、各教科の教員のところへ相談に行く。しかし、勉強をする気力が湧かないという場合には、教員ではなくカウンセラーを尋ねる人が多い。こうした人の流れや組織のあり方が、来談者を取り巻く構造となっている。要するに、来談者がどこへ語らいに行くかは、彼がどのように構造化された場に存在しているかに左右される。同じ組織や学校の中であっても、たとえば、精神科に受診している人は、勉強の相談であっても保健室やカウンセリング室を訪ねるかもしれない。それは、周囲の人々がそのような行動を望んでおり、また、本人もそのことを知っているからである。そうした環境からの圧力や周囲の人々が形成する解釈が、複雑な構造を作り上げている。そして、そのような構造が、来談者の主体性を支えているという側面がある。

比喩的な表現をすれば、カウンセリングの場で交わされる言葉を顕在的な交換とすれば、カウンセリングの周辺で本人が悩みや問題について誰かと語っている言葉の交換は潜在的なテキスト、つまり、「潜在内容」であるとも言える。一人の来談者、そして本人に対する周囲の人間のとらえ方（解釈）は、相互に影響を与えながら形成される。そして、そのテキストや解釈は間主観的に共有される場合もあれば、個人個人で別々の話が出来上がっている場合もある。

カウンセリングの場で語られ、カウンセラーが正確に知ることができるのは、来談者が語る事柄のみであることがほとんどである。来談者の相談内容について、その背景にあるすべての解釈や語らいの実態を探ることは効率的ではないし、すべてを明らかにすることなどはカウンセラーにはできない仕事である。そこで、カウンセラーがすべき作業は、本人が来談するに至った過程を把握すること、そして、来談者が語る事柄に対して、来談者自身がどのような引き受け方をしているのかを知ることでありと考えられる。

3. 現代の来談者たち～代理の主体、あるいは否定する主体

いわゆるカウンセリングの教科書等で、来談者として想定される人は「自らの悩みを自ら悩む主体」である。カウンセラーが待ち、期待する来談者はこのような、ある種の能動性、積極

性をもって悩みを自ら悩む人である。もちろん、悩みが明確ではない来談者や、カウンセラーと称している人物を信用することができずに悩みを話すことをためらっている来談者も想定されている。そうした来談者であっても、その悩みをどう打ち明けてよいのか、どのように話してよいのかを迷っているのであり、自らの悩みを悩むという点では、彼らは葛藤する主体であると言える⁷。

悩みというものが、自ら望む生活や人生に何らかの影響を与え、それを何とかしたいと決断した人がいたとしよう。そして、その人がカウンセリングに来談するのであれば、面接はスムーズに進むであろう。来談者は、悩む主体、葛藤する主体としてカウンセラーとともに問題に対峙する。教科書などには、カウンセラーの仕事は、来談者が自ら問題を解決するためにサポートをし、エンパワメントすることだ、などと書かれている。多くのカウンセリング理論において、来談する相談者は自らの悩みを悩む主体であることが当然のように前提とされている。新聞や雑誌などに掲載されている人生相談に相談を寄せる人々も「葛藤する主体」として自らを位置づけ、そのような人物像を文章のなかで構築するのが常識であろう。

しかし、私見によれば、今日の来談者の多くは葛藤を抱えていても、自ら悩みを引き受け、積極的に悩みについて語る事ができる主体ではない。筆者にカウンセリングを求める来談者の多くは、何らかの葛藤を胸の内に秘めつつも、自ら悩む主体として自己を位置付けることは少ない。

来談者は大きく二種に分類される。まずは、身近な他者についての相談者、つまり、本人の代わりに悩みを悩む「代理の主体」としての相談者たちである。こうした来談者は確かにある意味では、自ら悩む主体ではある。しかし、その悩みは自身が本来引き受けるべき悩みではなく、他者が抱えている悩み、あるいは、他者の存在によって受動的に生じた悩みである。彼らは悩みの種である特定の他者が身近にいないければ、カウンセリングには決して訪れないであろう。自宅などに引きこもっている子どもの親がカウンセリングに来る場合、その親は「代理の主体」であり、悩みの種はその息子や娘なのである。さらに、友達がうつ病だと診断されたが医者にはもう行きたくないと言っている。この場合一体どうすればよいのか、と悩む人もこれにあたる。総じて、「ある人」が然々について悩んでいるがどうしたらよいのかアドバイスが欲しい、などという場合、その人は「代理の主体」と言える。

いまひとつの主体は、上述の主体と似ているが、別の主体である。フロイトは、然々の状態のとき、あなただったらどうするか、と診察以外の場で医師に（つまり無料で治療法を聞き出そうと）尋ねた人が医師から「その場合、自分ならば医者に料金を支払って診療してもらおうね」と返されたという小話を紹介している。ここには、“「代理の主体」を装う”人物に対して、情報の対価を正当に要求することができる医者、すぐれて構造的な場の構築（いわゆる構造化の）例を垣間見ることができる。ここで引き出されるべき論点は、どのような場合でも無料で診察を避ける、つまり、カウンセリングに置き換えて言うと、無料ではカウンセリングも何もするな、ということではない。私設のカウンセリング室でないかぎり、カウンセリングの多くは無料で行われる。無料で行われるカウンセリングにおいても、悩みが本来自分のものではな

⁷ 悩み、葛藤は神経症的主体の中核的な心理状態である。正確に表現するならば、何らかの葛藤を抑圧するか、抑圧されずに意識化され、それが悩みとして思考や感情の活動に障害を生じさせるか、状況によりさまざまな心理状態が神経症的主体においては想定される。

いとして「代理の主体」を装っている来談者がいることは一考に値する⁸。カウンセリングという場で、まるで自分の問題について触れようとしないう来談者や、触れたとしても、自分には事の顛末に関する因果をまったく考える気力がなく、そもそも、自分の事柄が問題であるのかどうかということすら疑ってかかる来談者がいる。こうした人は、親や教師、その他から（さまざまな理由をつけられて）カウンセリングに行けと言われたから来たのだが、一体自分は何を話せばよいのか、と逆にカウンセラーに問うのである。

よって、ここでカウンセラーが立てるべき問いは「代理の主体」として悩みに距離を取る人が、本来の「葛藤を引き受ける主体」になり、自らの悩みを話の中心に据え、主体的に作業を開始するようになるのはいかにしてか、ということである。この問題の立て方では、上に記述した構造的には異なる主体が、同じように扱われている。もちろん、問題は後者の主体、すなわち、自身の悩みや葛藤を隠して、カウンセラーの前では「代理」であるかのように振舞う主体のほうである⁹。以下、「代理の主体」を装う（葛藤を）「否定する主体」について検討する。

4. 葛藤を否定しようとする来談者

我々は何かに悩む場合、悩みの実態・内実によって生じる葛藤のほかに「その悩みを悩むべきかどうか」という迷いを持つことが多いのではないだろうか。この悩みに伴う迷いは、悩みによって生じる情動的な煩わしさや消耗を軽減させて、主体の情動的なエネルギーを別の心的な関心事へと向ける契機になると考えられる。これに悩むくらいならば、今取り掛かっている重要な仕事を優先させるべきなのではないか、内面の葛藤にかかわるよりも、勉強したほうが自分の人生にとってはプラスになるのではないか、という発想である。

カウンセリングにおいては来談者自身が次のような発言をすることで、悩みが実は自分にとってはたいした問題ではない、とカウンセラーに伝えようと試みる。すなわち「こんなことに悩むなんて、自分はどうかしています」「ほかの人はこんなことには悩んでいないでしょう」「こんなことを話すと変に思われるかもしれません」「いつもこんなことを考えているわけではないのです」「ときどき悩むんですが、今は大丈夫です」「以前にはこんなことを考えましたが今はほとんどありません」などである。これらの発言は「悩み」が彼らの心の中に占める重要性を引き下げる発言、あるいは、悩みそのものから距離を取り、自分は悩みを悩む主体ではないこと、あまり悩みが無い状態に（現在は）あることを示そうとする発言である。

フロイトは分析中に来談者が述べるこのような発言を、ある無意識の表象の存在を示す「否

⁸ 学校現場やその他の公共の制度下におけるカウンセリングにおいては、クライアントがカウンセラーや受付に現金を直接支払うことはまだまだ少ないと思われる。

⁹ すなわち、「代理の主体」という概念は、他者の悩みを代わりに悩んでしまうという場合もあれば、自分の悩みについて、他人事のように振舞いつつ相談に訪れるという場合も含まれる。フロイトによる「自我の分裂」Ich-Spaltung/clivage du moi/ego splitting という概念は、フェティシズムの中核的な自我のあり方として示されたが、ここでは「悩み」や「葛藤」を、生活の調和や全体的平安に刻まれた欠如や傷として捉えている。そして、「悩み」があるということに対して否認が生じ、相反する自我の態度が見出されるようになる、と考えた。「代理の主体」として他者の悩みが煩わしいと感じる場合にも、それが自身の悩みの存在を主体に暗示するのであれば、そこで分裂した態度が生じることは十分に考えられる。すなわち、「いじめられるのは本人の問題だから、本人が自分の力でなんとかすべき」と一方では考えつつも、過去の自分のいじめ体験を思い起こしてしまい、悩んでしまう教師や親などがその例である。

定」die Verneinung」として捉えた。すなわち、否定するという行為そのものが、否定された当の表象が存在していることの象徴となっている。その線で解釈すると、こうした発言（象徴化）のおかげで来談者の「思考は抑圧の課する諸制約から解放される」。「これは大した悩みではない」と葛藤の存在を否定することによって、逆説的に、それこそが悩みであることを示しつつ、それについて距離をおいて安心して話をするができる、と考えることができる。

葛藤の存在を否定するという傾向は、筆者のクライアントに限られない。心理状態としては実態的に捉えやすい各種の心気症やパニック障害、さらにはアスペルガー症候群やAD/HDなどの名称が頻繁にカウンセリングにおいて用いられている。さらに、脳の機能障害や体質的な要因を重視して、これらの話を長くする傾向がクライアントの中にも多いのは周知のとおりである。こうした傾向は、多くのカウンセラーが、来談者がいかなる葛藤を抱いているのかという内実を問うことを止めてしまっていることを示している。この問題については、抑うつ社会の問題としてルディネスコがより詳細に論じているとおりである¹⁰。見えない異質な次元（ここでは心的な葛藤）について考えることを拒絶する傾向が制度的な姿で社会に受け入れられているため、来談者の多くは自らの葛藤の存在を他者によって否定された不幸な人たちであるともいえる。彼らは親や教師、知り合いなどから「気にすることは無い、そこには心理的な要因はまったく無いので悩む必要はない」「主治医の先生のことを良く聞いて」などと聞かされて、自分の不幸な状態が自分自身の主体性を離れた何かの過程（身体的な疾患や環境）に由来し、それについてはまったく他者に委ねてしまう以外、あるいは、わけもわからず様子を見ること以外何もできないと言われてしまっているのである。青年期にある若い人たちは親や医者が下した診断に疑いも反感も抱かないことが多いように感じられる。カウンセラーは来談者や関係者の、葛藤に対する評価を文字通り受け止めないことが重要である。この点について、Fink, B. は次のように述べている。

分析主体（引用者註：来談者のこと）は、世界の他の側面、とりわけ面白くないとか、不愉快だとか不快に思っている側面に目を向けたくはないのである。分析家（引用者註：精神分析家のことであり、本稿の文脈で言えば、カウンセラーのこと）は分析主体が語る話を熱心に聞くが、聞いているすべてを信じてはならない。—中略—大抵の場合、私たちが話のすべて—分析主体の特定の出来事の話か、それとも彼の生活一般の話について—を聞いているのか、それともその話の特定部分について巧みに編集された状態で聞いているにすぎないのか、ということについては、あまり露骨に疑うようにはせず、少しずつ疑いを持つべきである。さもなければ、分析主体は話していることを私たちが信じていないという印象を受けるかもしれない、自分の話を信じてくれる誰かを捜そうという、ありがちな行動に出る。

要するに、来談者自身は、本当に彼らが問題に感じている不快感や葛藤をカウンセリングに

¹⁰ 「・・・ですからうつは、神経症でも精神病でもメランコリーでもない、「過労」や「欠損」、あるいは「人格の衰弱」の点から考えられた「状態」を指す、はっきりしない存在なのです。このような呼び名がどんどん受け入れられていったことじたい、二十世紀末の民主主義社会が、主体形成の核心としての葛藤を特別視することをやめたことをよくあらわしています。—中略—個人は、自分の無意識から逃げだし、そして自分のなかにある葛藤の本質を消去することばかり気にかけているのです。」(Roudinesco, E., 1999)

において最初から話すことは稀である、ということだ。

こうして葛藤を他者たちから否定され、自らも否定する彼らがなぜ、カウンセリングへと来談することになったのだろうか。たとえば、彼らは心のどこかで、何かうまいやり方を教えてもらえば楽になれるに違いないとか、何らかの知識やテクニックを教わることで状況が好転するだろう、という見通しを立てていると考えられる。そうした場合、知的な処理が可能となる（情動的な負荷は少ない）ので、「自分は悩んでいます」などと話さなくとも、フロイトの紹介したユダヤ人の小話のように「然々の事態に陥ったときは、あなたならどう対処するか」という問いを発することができる。よって、葛藤を避けようとする来談者にとっては、自分が何か葛藤していることを否定しつつ、カウンセリングを通じて何らかの情報を得るということが、情動的負荷の少ない対処法だ、と言えそうである。

しかし、このような来談動機は弱いと言わざるを得ない。もし、彼らがこうした情報によって悩みを知的に解決しようとするのであれば、カウンセリングよりもインターネットや書籍など、より手軽な情報収集によって事を済ませるはずである。来談者は、来談することに伴う情動的な負荷を乗り越えてやってきている。悩みを否定するクライアントはどのような背景から来談したのか、来談者を取り巻く環境から考えてみたい。

5. 来談の背景にあるものとしての不安

カウンセリングにおいて、来談者は「代理の主体」として、または否定という迂回路を通じて自身の葛藤について語り始める。しかし、この行為自体が一つの謎として映るのである。つまり、一方において、来談者は様々な人達から、場合によっては医師からも深く悩む必要もなく、ゆっくり休んで様子を見たほうが良いと言われていたり、葛藤があったとしてもそれは来談者の引き受けるべき類の受難ではなく、環境や身体的事情、家族などに委ねるべきものとして捉えるようにと示唆を受けている。したがって、自身の抱える葛藤について、自分は病気であるとか、周囲の人が悩むべき事柄であるとして、自ら悩まなくても良いという誘惑が強くある。それにもかかわらず、来談者がなぜカウンセリングに来て、否定という迂回路を通じてでも、葛藤に対処する知や方法を求めるのか。そこには「葛藤を引き受けなくても良い」という現代的な傾向に対する来談者の不安や疑問があるのだと考えられる。

私たちはよく、悩んでいる人に対して誰かが「あなたはあなたらしく」とか「そのままのあなたでい続ければそれでよい」「あまり深く悩まないで」「あなたのせいではない」などと言うのを耳にする。これらの言葉は、道徳的な罪責感や心的な葛藤を抱えている人に対して、少しでも気持ちを楽しませてあげるために言われるのであろう。言われた本人もそれを真に受けて、そのままの自分でよい、という感覚が芽生えて気が楽になる。しかし、この言葉は時として、発話者の意図とは別の特別な効果を発揮する危険性がある。

悩みを抱えている者にしてみれば「そのままのあなたでいて」「あなたらしく」という言葉は「そのような事柄を考えてはいけない」「そのようなには考えてはならない」という命令として受け止められる場合がある。これは幼児が性的な事柄について探求しはじめたときに親が「そのようなことに悩まないで」「いずれ分かるときが来るから、今は考えなくて、子どもらしくして」「そんなことを考えてはいけない」と言う際の、性の探求の禁止と同じような効果を持っている¹¹。Lacan, J. (1975) は「あなた」という言葉が意識以前に介入し、検閲も意識以前に機

能すると指摘している。この言葉がどのような状況で言われるかにもよるが、「悩まないで」という何気ない一言でも、時として主体の知ろうとする欲望を挫くのである。そして、知り、考える欲望に対して、身近な他者の命令や禁止が障壁となることに、人は大きな不安を感じるようになる。来談者が代理の主体としてカウンセリングに来る動機の一つには、このような自身の悩みたいという欲望が消し去られることに対する根源的な不安があるのではないだろうか。

外部からの「悩むな」という制止・禁止によって、主体の超自我は弱められるはずだ、という反論が考えられる。自我に対して批判的でさまざまな厳しい要求を突きつける超自我の強さが自我にとっての葛藤や悩みの源泉であるとするれば、周囲の「悩むな」という助言はそうした超自我からの要求を緩和し、自我を安心させる契機となるのかもしれない¹²。「お父さんは厳しいけれど、あまり本気にすることはしないのよ」というように。人は、こうした観点からアドバイスをして、相手を安心させようと試みるのかもしれない。

しかし、人のアドバイスに含まれる命令的な側面は、内面における超自我からの批判に統合されて、さらに自我を苦しめることもある。ここでなされる命令とは「悩むな」といった禁止であると同時に「楽しめ!」という強制である(ジジエク、1991)。主体にとって、超自我はこのような命令をするものとして、性愛化された卑猥さ¹³として主体に感じられるようになる。そうして、主体は葛藤そのものを保持して悩みつづけるか、それとも、たとえば道徳的なマゾヒズムにおけるように、性愛化された超自我の卑猥さに従属してしまい、懲罰を受けたり人から批判されることに喜びを見出すような状態になるか(懲罰欲求)、あるいは、「悩まないで」といわれた人物に依存的になるか、きわめて不安定な状態に置かれることになる¹⁴。

「楽しめ」という命令によって指し示される領域とは、本来、悩みを中核的な心理状態として持っている神経症者には、極めて近づきたい領域である。神経症的主体は、何かアドバイスをくれるような(たいていは目上の)他者が常に中立的であること、政治的に公正な表現を用いることなどを期待している。しかし、「楽しめ」という命令を聞く場合には、こうした他者の公正さは背景に退き、むしろ、人間関係やコミュニケーションに含まれている、(それまでは)ミニマルな水準にとどまっていたセクシュアリティのようなものが大きく立ち現れる。このような声や視線のセクシュアルな成分を意識化することは神経症的な主体がもっとも避けたいことである。つまり、彼の不安定な心的状態からして、このような享楽の領域はもっとも避けなければならないはずのものである。いくつかの調査が示したように、カウンセラーが来談者と性的な関係を持つような“倫理違反”が生じるのは、このような領域が開かれたときに、悩む主体を支えていた構造が変化したためだと考えられる。これはカウンセリングに限らずとも、

¹¹ たとえば Freud, S. (1925) は「個人が心理学的に分不相応の生活をするように強いられている」としたうえで、「社会は、文化的な偽善の状態の内にあり、これに不確実感だの、否定しがたい不安定を批判や議論の禁止で防ごうとする欲求だのが伴わざるをえない」とまで述べている。

¹² 「自我は、自我にとっての理想、すなわち超自我によって提起された要請を達成できないと気づくと、不安の感情(良心の不安)をもって反応する。」(Freud, S. 1929)

¹³ 悩む人を慰める目上の人物の声の調子や目つきなど。フィンク(1997)は次のように述べている。「……道徳原理の言明は、その宣言に伴うリビードや享楽とは分離できない……。つまり両親から教えられた教訓(たとえば、「あなたが人にしてもらいたいように、人にもしなさい」と、それが発せられた声の調子とは分けられないのである。)(邦訳 273 頁)

¹⁴ 「このマゾヒズムは性愛の要素によっても構成されていることを意味するのであるから、人格の自己破壊でさえも、リビード的な満足をとまなうことなしにはなされ得ないのである。」(Freud, S. 1929)

一般の人間関係においてもよくある出来事である。たとえば、「悩みを聞いてあげているうちに、恋愛関係になる」という“関係性の発展”も同様である。

このように、「楽しめ！」という命令によって指し示される「享楽」には、当該の人間関係（先生と生徒、カウンセラーと来談者、先輩と後輩、その他の象徴的な水準で保たれている人間関係）を一步踏み越えさせるような力が備わっている。悩まないでも済む手段をさまざまに提供している業界の人々や「一人で悩まないで」を連呼する、笑顔を絶やさない心の専門家たちは、神経症そのものよりも苦痛に満ちた領域を悩める神経症者に指し示すという逆説を演じているように思える。こうした環境にあって、来談者は葛藤についての語らいそのものの可能性を無に帰してしまうような、悩みの無化、主体性の無化に対して不安を抱いて、カウンセラーを尋ねるのではないかと考えられる。

知的欲望、考える欲望、何かを見出したいという欲望の果てに出会うかもしれない、トラウマチックな事柄を避けさせる、という親心から「あなたは悩まないでも良い」という言葉が出てくるのかもしれない。ラカンは「知への欲望」よりも「知りたくないという意志」のほうが一般には強いことを指摘している。情動的、身体的苦痛を避けることは、現代では承認されているとも言える。悩みは今やカウンセリングとはまったく性質を異にするシステム（例えば、新たな消費や消耗、自己啓発、向精神薬などの専門的解決）に委られることが多い。そうした機会に恵まれているにもかかわらず、来談者はやってくる。この線で考えるならば、何かを探求しようという来談者に、あまりにも早く来談者の話すことに共感をして、彼ら自身の「否定する主体」というあり方を肯定することは避けなければならない。

むしろ、来談者や周囲の人々がゴミ屑のようなものと見なしで見向きもしない気持ちや言葉、つまり「自分」や「自己同一性（アイデンティティ）」などといった個別化に統合されない気持ちや言葉の断片を聞き続けることがカウンセラーの役割だと考えられる。言い換えるならば、本当は今ある自分ではないような、何か別の自分（主体）になりたかったのだ、というような発言を聞くことがカウンセリングの作業なのだと考えられる。

参考文献

- Freud, S. 1938 [1941] Die Ich-Spaltung im Abwehrvorgang. Gesammelte Werke, XVII.
Freud, S. 1925 [1948] Die Verneinung. Gesammelte Werke, XIV.
Freud, S. 1925 [1948] Die Widerstände gegen die Psychoanalyse. Gesammelte Werke, XIV.
Freud, S. 1929 [1948] Das ökonomische Problem des Masochismus. Gesammelte Werke, XIV.
Roudinesco, E. 1999 Pourquoi la psychanalyse?, LIBRAIRIE ARTHÈME FAYARD. (『いまなぜ精神分析なのか 抑うつ社会のなかで』信友建志・笹田恭史訳、洛北出版、2008)
Lacan, J. 1975 Le Séminaire Livre I. Les écrits techniques de Freud. Seuil.
Zizek, S. 1991 『為すところを知らざればなり』みすず書房
Fink, B. 1997 A Clinical Introduction to Lacanian Psychoanalysis, Theory and Technique. Harvard University Press. (中西・椿田・舟木・信友訳『ラカン派精神分析入門 理論と技法』誠信書房、2008年)
亀田達也・村田光二 (2010)『複雑さに挑む社会心理学—適応エージェントとしての人間』有斐閣アルマ
木村敏 (1981)『自己・あいだ・時間』弘文堂
木村敏 (1970)『自覚の精神病理—自分ということ』(木村敏著作集1『初期自己論・分裂病論』弘文堂、2001年、所収)
ブランケンブルク 1978 『自明性の喪失』みすず書房